『紅楼夢』と『源氏物語』の異同

陳熙中（北京大学教授 中国紅楼夢学会常務理事）
訳：王秋陽（山口大学大学院東アジア研究科博士課程１年）

1　中国の『紅楼夢』と『源氏物語』の比較研究

『紅楼夢』の作者は曹雪芹（1715?～1763?）で、彼は生前80回のみを書き終えて、写本の形で世に広まった。後にある人物が続く40回を書きあげ、合計120回、約100万字以上の作品となり、1791年にはじめて木活字本として印刷された。『村上文書差出帳』の記載によれば、1793年（寛政5年）、「南京船」と呼ばれる中国商船が9部18套の『紅楼夢』を長崎に将来した。1892年、森槐南（1863～1911）が『紅楼夢』の第一回楔子の部分を抄訳して、『紅楼夢序詞』と名づけ、島崎藤村（1872～1943）が第十二回を抄訳して、『紅楼夢の一節――風月宝鑑』と題した。以後、異なる抄訳本が出現した。松枝茂夫（1905～1995）は11年の歳月を要して120回本を翻訳して1951年に全巻が完結した。これが日本における最初の『紅楼夢』全訳本である。現在は複数の全訳本が公にされている。

「黄遵憲与日本友人筆談遺稿（黄遵憲と日本の友人との筆談遺稿）」によれば、1878年、時の駐日公使館書記官で著名な詩人の黄遵憲（1848～1905）は日本の友人に『紅楼夢』を紹介し、「『紅楼夢』は天地開闢以来、古から今に至るまでの傑作で、太陽や月と輝きを争い、万古不易と称するに足る内容である。貴国の方は中国語を解さず、その精妙さを完全に理解できないことを遺憾に思う」と述べた。それに対して、大河内輝声（1848～1882、号は桂閣）は、「我が国には『源氏物語』という書物があり、その趣は『紅楼夢』と酷似している。『紅楼夢』は栄国府と寧国府の閨房のことを描き、『源氏物語』は宮中の情事を描写しているが、この事を以てしても曹雪芹を驚嘆させるものである」と答えた。

1909年、大河内輝声の漢学の師である依田学海（1833～1909）は雑誌『心の花』に「源氏物語と紅楼夢」という短文を発表し、「『源氏物語』を小説として見れば、酷似するのが『紅楼夢』である」と指摘した。これはおそらく日本において両書を比較研究した最初の文章である。1954年、松枝茂夫が「紅楼夢と源氏物語」を発表して以降、比較研究に従事する研究者が現れるようになった。

日本における『紅楼夢』の翻訳や研究に比べ、中国での『源氏物語』の翻訳や研究のスタートは比較的遅い。1957年に銭稲孫が「桐壺」を翻訳した。その後、著名な画家・作家である豊子愷（1898～1975）が前世紀60年代初頭に心血を注いで全書を翻訳し、「彩筆　昔　曾て濁世を描き、白頭　今　又　『紅楼』を訳す。時人　将に老風流と謂うべし」という言葉を書き記している。『源氏物語』は恰も中国の『紅楼夢』のようなものだ、との意である。しかし「文化大革命」の最中であったため、豊子愷の訳本は1980年から1983年にようやく人民文学出版社によって出版された。これは中国大陸で最初の『源氏物語』の全訳である。（台湾の林文月女士は1973年から1978年にかけて『源氏物語』を訳出して出版した。彼女が翻訳を始めたのは豊子愷より遅かったが、出版は豊子愷より早かった。）

豊子愷の訳本が出版されて後、『源氏物語』はようやく中国に広く知られるようになり、この二十年間に、『源氏物語』と『紅楼夢』を比較した論文は、40篇前後にのぼり、量的には日本を超えている。それらの論文テーマを見てみると、「酷似する二つの巨作――『源氏物語』と『紅楼夢』について」、「賈宝玉と光源氏の比較」、「源氏と宝玉：二人の情愛観の違いについて」、「紫の上と薛宝釵――封建時代の二人の女性を比較して」、「気品の相似と精神の相違――黛玉と紫の上の性格特徴を比較して」、「同工異曲の哀歌――『源氏物語』と『紅楼夢』のテーマの悲劇性について」、「『源氏物語』と『紅楼夢』の芸術的特性について」、「理想の樹立と破滅――「大観園」と「六条院」との比較」などがある。

タイトルに示されるように、これらの文章は異なる角度から両書について比較を行い、以下のような問題を包摂している。

（一）人物像の比較：主に男性主人公の賈宝玉と光源氏、女性主人公の薛宝釵（或いは林黛玉）に集中している。

（二）中心テーマの比較：社会、歴史、政治、階級などの角度から二つの小説の中心テーマを論述するものがほとんどで、封建時代における社会矛盾と政治闘争が濃厚に反映されているという見解が多く見られ、とりわけ女性たちの悲惨な境遇に注目される。両書ともに恋愛感情の描写は女性が中心で、封建時代の女性の悲劇的運命を描くことに重点が置かれていると指摘する者もある。相違点としては、『源氏物語』は一夫多妻制下の女性の苦境を主として描出しており、『紅楼夢』は封建時代の恋愛や婚姻が自分では決められないという社会的な悲劇を描き、それによって封建制度の不合理を批判している。両書に現れている仏教思想についても、比較分析を行った学者がいる。

（三）表現形式についての比較：仮に『源氏物語』が単線的に展開する連続形式が採られているとすれば、『紅楼夢』は複線的に展開する網状形式が採られている。さらに両書ともに大量の詩歌を取り入れており、作品内容と不可分の有機的要素となっている。また、『紅楼夢』の「大観園」と『源氏物語』の「六条院」が、小説を構想するうえで大きな役割を果たしていることも、相似点として挙げられる。

両書に「かくまでの相似点があること」、中日両国には頻繁な交流があったことから、この二つの作品には何らかのつながりがある

と推測した者がある。「『紅楼夢』における題材の選択、人物の描写、ストーリーの展開、構成などは『源氏物語』の影響を受けた可能性があ」り、「曹雪芹は恐らく『源氏物語』を読んだか或いは内容を聞いたことがあるので、影響を受けている」という見解である。しかし、多くの研究者はこれを根拠のない臆測と見なし、現在に至るまで曹雪芹が『源氏物語』を読んだ、或いは内容を聞いたという証左はない。

2　賈宝玉と光源氏

『紅楼夢』は賈宝玉と林黛玉・薛宝釵の間に起こる恋愛や婚姻の悲劇を描いており、彼らは自由に恋愛をすることができず、自分の意志で結婚も決められない。貴公子の賈宝玉は従妹の林黛玉（父方のおばの娘）も好きであれば、従姉の薛宝釵（母方のおばの娘）も好きである。しかし長期間の接触を通して、宝玉は黛玉の考え方（例えば勉強して役人になることに反対するように、ある程度封建思想に反対する）が自分に一致していること、薛宝釵が封建道徳を完全に容認していることに気づいたので、賈宝玉はいちずに林黛玉を恋した。ところが封建制度下の家長は家族の利益（薛宝釵の家は十分な経済力がある）のため、宝玉と宝釵とを無理矢理に結婚させ、黛玉を犠牲にすることを厭わなかった。宝玉はこうした結婚を不満に感じ、遂には家を出て出家してしまった。その結果、三人の若い男女はいずれも封建制度の犠牲者となったのである。

賈宝玉は高貴な出身であり、美男子（「面は中秋の月のごとく、色は春の暁のごとし」〔第三回〕）で、聡明英知、気品抜群、博学多才である。これらの特徴はいずれも光源氏と似ている。光源氏は、「世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ」、「めづらかなる稚児の御容貌なり」（「桐壺」）とあるように、作品中に顔立ちが美しく、才能抜群で、詩・書・画など精通しないものはなく、さらに歌が上手で舞いにも優れていることが度々描写されている。

二人の性格の中で一番注目される共通点は女性が好きだということであり、「博愛」という特徴を持っていることである。

賈宝玉が満一歳の時、父親は将来の志向を試すために、世の中に存在する品物を数多く並べ、彼に掴み取らせた（俗に「抓周」という）が、思いもよらず彼は他の物には目もくれず、紅・白粉・簪・腕輪に手を伸ばした。これを見た父親は、「将来は酒や女に溺れるのが落ちだ！」と大いに怒った。また子供話に言うことも変わった話ばかりで、「女の子は水でできた体、男は泥でできた体。わたしは女の子に会ったら心地よいが、男に会ったら汚れた臭気に襲われる感覚さえおぼえる」（第二回）とさえ言う。

祖母に溺愛されたことにより、賈宝玉は幼いときから姉妹たちと一緒に生活し、その後も姉妹たちについて「大観園」に引越して住み着いたが、周りには天真爛漫な若い下女が付き添っているので、宝玉は純真で清潔な「女性の国」に暮らしていると言える。この「女性の国」は男性を主体とする外の腐敗した俗世界とは明らかに対照的な世界である。

故にこうした環境に育った宝玉はすべての女の子に親近感を抱き、みなを愛した。彼は林黛玉も好きであれば、薛宝釵も好きである。黛玉は、「妹のわたしのことを心にかけていてくださいますことはよく存じておりますが、宝釵お姉さまにお会いになると、すぐに妹のことは忘れておしまいになるんですよ

ね。」（第二十八回）と彼をからかったことがある。他の女の子に対して、たとえ身分が低い小間使いでもやさしく労わり、関心を抱いている。そのため他人から見ると、彼は「もっぱら女の子たちの中に入りこんでふざけるのが好き」な人物のように見える。

周知のごとく、光源氏は自ら、「なほ心から、好き好きしきことにつけて」（「薄雲」）と言い、一生涯数多くの女性を追い求めた。例えば、紫の上、空蝉、夕顔、朧月夜の君、藤壺中宮（藤壺女御）、六条御息所、末摘花などである。正妻の葵の上との関係が比較的疎遠であることを除いて、一般的に言えば、彼は自分が求めた女性全員にある程度の恋愛感情を持っていて、少なくとも彼女たちを鄭重に扱った。「かやうにても、御蔭に隠れたる人びと多かり」、「いづれをも、ほどほどにつけてあはれと思したり」、「ただかばかりの御心にかかりてなむ、多くの人びと年を経ける」（「初音」）とあるとおりである。

しかし、一部の中国の学者によれば、光源氏の「博愛」は賈宝玉の「博愛」とは本質的な相違がある。

賈宝玉が女の子を好きなのは、男性より女性のほうが純潔だ思っているからである。彼女たちは往々にして男性からの圧迫と侮辱を受けているので、彼は女性に対して賛美・賞賛・尊重・同情・愛着という態度で接した。彼の祖母は彼が下女たちに対して「色気づいてきた」のではないかと疑ったことがあるが、結局そのようなことはなかったことが証明された。祖母は次のように言っている。「わたしにも解せないのだが、いまだかつてあんな子供にはお目にかかったこともない。ほかのいたずらなら当然のことなのだが、女の子たちと仲良くするのだけは、何とも理解できない。そのことが心配で、いつも冷静に見ているのです。女の子たちとふざけているのは、きっと身も心も成長して、色気づいてきたので、彼女たちと親密にするのが好きなのだと思っていました。ところが細かに観察してみると、どうもそのためではないようです。何とも不思議なことです。思うにもともとは女の子であったのが間違って男に生まれてきたのね。」（第七十八回）

賈宝玉は恋愛一筋で、林黛玉をひらすらに愛した。黛玉も時おり宝玉が薛宝釵を愛しているのではないかと疑うが、それはただの誤解に過ぎない。小説中に次のような一節がある。「宝釵は生まれつき肉づきがよいので、ある時、宝玉が雪のように白い彼女の柔らかそうな上腕を見て、思わず羨望の念を抱いて、ひそかに思った。この腕が妹の黛玉の体にくっついていたら、あるいは撫でることができるかもしれないが、彼女の体にくっついているんじゃあ、残念だが撫でるなんて幸運にはめぐり会えないな。」（第二十八回）

これに反して、光源氏が女性を追い求めるのは完全に個人の私欲によるもので、相手の気持ちなど考えない。中国の学者の多くは彼に対して批判的な態度を示している。例えば、日本文学研究者の葉渭渠が豊子愷の訳本のために書いた「序文」には、次のようにある。「源氏は自分の権勢をほしいままにして、たくさんの女性を踏みにじった。たとえば、夜中に地方官の夫人空蝉の部屋に入り込んで、夫のある女性を汚したり、低い身分出身の夕顔の恋愛感情を踏みにじって彼女を悶死させたり、継母の藤壺が自分の母に似ているのを見て、思慕の情から肉体関係を持つようになったり、没落した家柄の末摘花の部屋に入り込んで彼女をからかい、醜女であることを知って、それを冷やかしたりした。この

他、紫の上・明石の君などの異なる身分の女性に対しても同じように傷つけた」（2009年北京大学出版社版の葉渭渠『日本小説史』）。光源氏の思想に倫理・道徳・感情はなく、あるのは女性に対する蹂躙侮辱の願望だけであるという学者もいる。

ために、中国の多くの研究者は賈宝玉と光源氏を比較する際、宝玉の行為・思想と精神の境地は源氏より高いと考えている。しかし、中国人の倫理道徳とイデオロギーで、異なる文化伝統の中に生み出された人物を分析・評価してはならないと指摘する学者もいる。一部の学者、たとえば葉渭渠は、光源氏の女性に対する態度を厳しく批判する一方、『紅楼夢』と『源氏物語』の異なった価値感を具体的に分析した。『紅楼夢』は現実を観察するときには、道徳的判断を下すことによって善悪を区別し、善と美の統一を強調し、善を審美感覚の基準としている。これに対し、『源氏物語』は倫理道徳から判断を下すのではなく、感情を重視すること（主情主義）から出発して、「物の哀れ」を善悪の判断の基準とすると考え、醜と美の調和を強調し、真を審美感覚の基準としていると指摘する。つまり、光源氏の行いは肯定するに値しないけれども、『源氏物語』は日本の価値感や審美感覚を具体的に表現したことに価値があるというのである。

ここで確認しておかなければならない問題がある。

第一は、

> 日中両国の倫理道徳と文化伝統にはどのような違いがあるのか？例えば、「乱倫（近親相姦）」は中国ではたいへん非道徳とされており、厳しい非難を受ける。日本人は「乱倫」をどのように考えているのか？『源氏物語』の中で光源氏に対して比較的に寛大な態度をとるのは、作者紫式部個人の美学思想なのか、それとも日本人の普遍的な考え方なのか？

第二は、

> 中国人が『源氏物語』を読む場合、日本人が『紅楼夢』を読む場合、自国の道徳基準、価値観で作品の優劣を判断することはできるのか？

の二点である。

3　薛宝釵と紫の上

『紅楼夢』の中の薛宝釵は美人であるだけでなく、封建道徳を完全に遵守する淑女である。彼女は、「品行方正で、豊満で美しい容貌」で、「闊達で、分相応で潮時を心得ているので、黛玉が孤高をもってみずからを任じ、身の回りに塵ひとつよせつけないのには比べものにならず、黛玉より召使いの心をつかんでいる」（第五回）。封建的な家長たちはことのほか宝釵のことが気に入り、最終的には宝玉の妻に選んだのである。

『源氏物語』における紫の上も完璧な淑女のイメージを持っている。「あやしきまで、すずろなる人にもうけられ、はかなくし出でたまふことも、何ごとにつけても、世にほめられ、心にくく、折ふしにつけつつ、らうらうじく、ありがたかりし人の御心ばへなりかし。さし

もあるまじきおほよその人さへ、そのころは、風の音虫の声につけつつ、涙落ちとさぬはなし。まして、ほのかにも見たてまつりし人の、思ひ慰むべき世なし。」（「御法」）というのが紫の上に対する描写である。

ために、一部の中国の学者は次のように考えた。東洋の伝統的な道徳観念から論ずれば、紫の上と宝釵は「この上なく愛しい」、「最も模範的な」女性と言うことができ、二人ともに封建的な礼儀に合致する「淑やかな」女性で、貴族社会で推賞される「理想」の人物である、と。

しかし、『紅楼夢』の作者の宝釵に対する態度と『源氏物語』の作者が紫の上に対する態度は異なる。紫式部は紫の上に対して基本的には賞賛と同情の態度を示しているが、曹雪芹は宝釵の悲劇的な運命には同情するものの、賞賛と肯定の対象は宝玉と黛玉で、宝釵ではない。（注：宝釵と黛玉とどちらが優れているかという問題は中国では長い間論争となっているが、ここでは詳しくは述べない。）

二つの小説の作者のそれぞれの女性主人公に対する異なる態度は、実は彼らが生きた時代の違いが決定したのである。中国は明末清初に至ると、すでに封建社会の末期を迎え、伝統的な封建道徳は人々の思想の中に重要な位置を占めてはいるものの、同時に反対の声が現れ、一部の先進的な知識人は初歩的な民主主義の思想を備え、伝統的な封建道徳に対抗しはじめた。曹雪芹はその中の一人である。ために薛宝釵のように完全に封建道徳を守ろうとする人物は、彼の考える理想の人物ではない。ところが紫式部が生きた時代には、まだこうした新しい思想が現れておらず、彼女にとって、紫の上は当然完璧な理想の人物になるのである。

最後に、「末世」の問題にも触れておきたい。ある学者が「末世の哀歌――『源氏物語』と『紅楼夢』の比較雑談」という文章を書いている。その文章は「末世」という角度から二つの小説のテーマを解釈しようとしたもので、盛んな世の中であっても末世は必ず訪れるということを取り込んでいるのは、両著の精髄であるとしている。

『紅楼夢』と『源氏物語』はいずれも「末世」のことに言及している。しかし、『紅楼夢』が反映しているのは封建社会全体の末世であるのに対して、『源氏物語』が反映しているのはある時代の末世であって、両書の置かれた時代には大きな違いがある。

参考資料・参考文献

饒道情「『源氏物语』と『紅楼夢』比較研究の綜述と思考」,『紅楼夢学刊』2004年第3輯。